

氏名（生年月日）	石橋賢太（1983年4月16日）
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	文博甲第109号
学位授与の日付	2016年7月29日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	山鹿素行の朱子学批判
論文審査委員	主査 水上 雅晴 副査 中村 昇 清水 正之（聖学院大学人文学部教授／聖学院大学学長）

内容の要旨及び審査の結果の要旨

I. 本論文の構成

はじめに

第一章 素行についての研究史と課題

- 一、江戸時代一戦前の研究
- 二、終戦—一九七〇年までの研究
- 三、一九七〇年代以降の研究
- 四、先行研究の問題点

第二章 素行の朱子学批判の再検討

- 一、「異端」としての朱子学
- 二、朱子に対する評価
- 三、「天命の性」の批判
- 四、宋儒に対する評価
- 五、素行の宋学批判と周濂溪

第三章 周濂溪批判について

- 一、「主静」の批判
- 二、『太極図説』の批判
- 三、周濂溪の「作為」の背景
- 四、素行の思想における「自然」

第四章 「公」について

- 一、「義」・「利」と「格物致知」
- 二、「欲」の肯定について

- 三、「利」・「欲」と「公」との関係
- 四、素行の「公」の性格について
- 五、周濂溪批判との関連
- 第五章 『中朝事実』について
 - 一、「中国」と「水土」
 - 二、宋代華夷思想・神道思想との比較
 - 三、周濂溪批判の思想と「水土」重視
 - 四、「水土」と「道」
- おわりに

II. 本論文の意義

武士を人倫の指導者として位置づける士道論を提唱した山鹿素行（1622-1685）は、朱子学を批判した思想家という性格づけがなされるのが通例である。朱子学批判者としてのイメージが定着する上で大きな役割を果たしているエピソードとして、寛文六年（1666）に『聖教要録』を刊行したところ、幕政に重きをなしていた保科正之（1611-1672）の逆鱗に触れて赤穂に配流されたことが挙げられる。配流の原因については、同書において朱子学批判を展開したため、と説明されることが多いが、実際のところ、現行の『聖教要録』には朱熹（1130-1200）を名指しで批判している文言を見いだすことはできず、むしろ朱熹を評価している発言さえ見受けられる。素行が朱子学と異なる考えを表明している箇所も少なくないのもまた事実だが、如上の事柄全体を踏まえると、素行＝朱子学批判者と見なすことには十分な根拠がなく、素行と朱子学との関係については問い直してみる必要があるのではないだろうか、という疑問が生じてくる。かかる問題意識から出発して本論文は構想・執筆された。

素行と朱子学との関係を論じたこれまでの研究動向を振り返ってみると、著者の指摘が当てはまる状況にあるかに見える。井上哲次郎『日本古学派之哲学』（1902）は、素行のことを伊藤仁斎（1627-1705）、荻生徂徠（1666-1728）と並べて、「古学派」の一人と位置づける。丸山眞男『日本政治思想史研究』（1952）は、近世日本の思想の展開について、朱子学的思惟が徐々に解体し、徂徠の登場によりその解体が完成したという構想図を描き、朱子学の哲学的立場の「解剖」が推し進められる過程の初期段階に属する思想家として素行を位置づけている。この二人に代表されるように、これまでの研究は、素行の思想が本質的に朱子学と対立するものであるという前提に立って議論を進めてきたと言える。少数ながら、田原嗣郎『徳川思想史研究』（1967）のように、素行の思想と朱子学との間に大きな違いは認められないとする研究もあるが、同氏の議論にしても素行の思想と朱子学とを対置させる構図の中で進められており、その構図の有効性や妥当性については、一度検証される必要があろう。

本論文の意義は、素行の思想と朱子学との研究に関して従来と異なるアプローチを提起し、それを実践したことにまず求められる。素行が朱子学批判と見なされるきっかけとなった『聖教要録』、

それに『聖教要録』の材料を提供した『山鹿語類』聖学篇（『聖教要録』は『山鹿語類』聖学篇のダイジェスト版という性格を持つ）を精読し、その中で論じられている事柄をこれまで用いられてきた図式にとらわれずに検討することを通して、素行の朱子学批判とされる主張が実際は周濂溪に対する批判であったことを解明することに成功している。さらに、新たな手法を通して得られた知見にもとづき、素行の他の著作についても検討を進め、従来とは異なる視点からの思想内容の分析が可能であることを示した点についても一定の意義が認められる。

Ⅲ. 本論文の概要

「はじめに」においては、素行の思想を朱子学と対置させて論じる従来の図式への疑問が提起される。『聖教要録』などの著述の中で素行が表明しているのは、古の「周公・孔子の道」に帰ることであって、そのこと自体、朱子学の否定に直接結びつくわけではない。素行が朱子学と異なる考え方を表明している箇所は散見されるが、その半面、朱子学を好意的に論じている記述もいくつか認められ、両者の関係には再考の余地がある、という問題意識が説明される。

かかる予備的な議論を踏まえ、第一章では先行研究の整理が行われ、素行の思想と朱子学との関係についての議論の変遷が詳細にトレースされる。戦前の研究の多くは、朱子学＝形而上的、素行の思想＝現実的という図式で両者の関係をとらえていて、とりわけ影響力が大きい代表的研究として挙げられるのが、丸山眞男『日本政治思想史研究』である。本書において丸山は、朱子学を「自然法」の思想と見なし、素行を朱子学の自然法的性格に対する批判者と性格づける。この丸山の見解と対立する立場を取る数少ない論者の一人が田原嗣郎である。田原は『徳川思想史研究』において、素行の思想も朱子学同様に「自然法」の思想だとしている。田原は、前述の井上から始まり丸山において決定的となった、素行の思想と朱子学との相違点を強調する研究史の流れに疑問を呈したわけである。

この田原の提言はほとんど省みられることがなく、その後の多くの研究は依然として素行の思想と朱子学とを対立的にとらえる構図の中で展開している。戦前から続く朱子学＝形而上的、素行の思想＝現実的という図式がいまだに主流をなしているのである。しかし素行の著作を吟味してみると、世界にはもとより秩序が備わっており、それは人間の作為とは没交渉で存在している、と素行が想定しているかに見える文言が確認される。すると、素行の思想＝現実的というこれまで主流をなしてきた見方は本当に正しいのか、という疑問が生じてくることが提起される。

第二章においては、これまで朱子学の批判者というレッテルを貼られてきた素行の言説に対する再検討が行なわれる。素行は自身の思想を「聖教」と称し、それに反する思想を「異端」と退ける。「異端」として指弾される主たる対象は仏教であり、さらにその影響下にある「伊洛濂閩」であるから、「閩学」の祖たる朱熹も「異端」の範疇に含まれることは自明である。ただしここで注意すべきは、仏教が「異端」であるのは「自然」に反しているから見なされるからであり、「伊洛濂閩」も同様の観点から批判の対象となっていることである。そうなると、素行を朱子学の自然法的性格に対する批判者と位置づける先行研究の前提が大きく揺らぐことになるのである。朱熹に対する素行の

評価を調べてみると、実践を志向していることは高く評価をしていて、「異端」として排除するばかりでないことも容易に理解される。

素行は、朱子学における人間観を理解する上での重要概念の一たる「天命の性」について、朱熹が先行する儒者からの影響を受けた結果、誤った理解に陥ってしまった、という趣旨の発言をしている。ここで注目すべきは、「天命の性」に対する朱熹の理解に影響を与えた儒者の存在が指摘されていることである。その点について『聖教要録』などを調べてみると、宋学の先駆者たる周濂溪（1017-1073）こそが朱熹を含む宋学の諸儒を誤った方向に導いた張本人である、と素行が認識していることが判明する。かかる見地に立つと、素行が周濂溪をどのように評価しているかが重要な論点として浮かび上がってくるのであり、朱子学に対する素行の立場を正確に理解するには、この問題の解明を避けて通ることはできなくなる。

第三章においては、周濂溪の学説に対する素行の批判内容が検討され、それに関わる議論が本論文の中核をなす。素行が見るところ、周濂溪は、万物の生成・発展は、「静」と「動」という対をなす二つの原理によって実現され、「静」なる「太極」が万物の根源であると考え、両者の中、「静」の方を重視し、修養論としては「主静」を主張する。二つの対立するものの中、一方を重視することは、「清」と「濁」との関係においても看取され、周濂溪は「清」を重視し、「濁」を退ける。この考えは、気の清濁によって「性」を「本然の性」と「氣質の性」とに分ち、「悪」の根源となる「氣質の性」を除去して「本然の性」に復することを志向する朱子学の基本的態度に結びつく。周濂溪とは異なり、素行は、「動」と「静」、「清」と「濁」をそれぞれ二項対立の関係でとらえて一方だけを排除するようなことはしない。「太極」が具現化したのが「天地」であり、この「天地」は「自然」でもあり、人が認定する秩序に合致することもあるが、決してそれにしぼられることは無い。「自然」は無限の連続性を持ち、分割不可能なものであり、人が自分にとって都合の良い部分のみを切り取ることはできない。「自然」は人にとって好ましくないものもそうでないものも均しくもたらすのであり、人はそのことを前提にして思考し行動せねばならない。かような思想的立場に立つと、世界における諸現象は一つ一つの段階に分割可能であると見る周濂溪の思想は、「自然」に反する「作為」として批判されることになる。

自身の思想的立場を明確にするために素行が攻撃した直接的な対象が周濂溪であることが明らかになったところで、続く二つの章では、その理解の上で『聖教要録』や『山鹿語類』聖学篇以外の著述における論点と周濂溪批判との関係に考察の歩が進められる。第四章では、「公」に関する素行の説を中心に議論が展開する。素行の理解によると、朱子学は「利」や「欲」をば人が正しい認識に達するのを妨げる夾雑物と見て、それらを除去することで本来の善悪を知ることができると考え、「利」や「欲」と「公」とを対置させる。それに対して素行の考えでは、「利」や「欲」は人間がそれら無しに生きることは不可能であり、機械的に排除すべきものではない。「利」や「欲」も利用の仕方によっては「公」を達成する手段ともなり得るし、人にはそのための善悪を識別する知性が本来備わっている。「公」は一つの尺度によって規定され得る固定したものではなく、状況に応じてその内実が変わるのであり、個人はその状況に応じた対応が必要になる。当然ながら、個々

の「公」が対立する状況も生じ得るのであり、そこに要請されるのが全体を俯瞰できる立場からの調整であり、政治がその役割を担う。「公」に関する以上の議論は、上記の周濂溪批判において展開されていた考え方が応用されたものと見ることができる。

第五章では、『中朝事実』に代表される素行の日本主義について検討がなされる。書名に見える「中朝」は日本を指しており、素行は日本が他の諸国に勝っていることを主張する際に、地理的条件である「水土」を判定基準とする。「水土」の差異が国ごとの思想・文化の相違に結びつき、それ故に一つの国から生まれた教えや価値観が他の国には適用しない場合があることが論じられる。「水土」を重視する発想は、素行以前にはあまり見られず、素行が若い頃に学んだ中国宋代の華夷思想や日本の神道思想にも看取されない。「水土」の発生について言うと、素行は『日本書紀』神代巻の「天地開闢」の段の記述を用いて説明しているが、引用されている記述はそのごく一部に過ぎない。著者は引用が省略されている部分に着目し、そこには天地発生の起源や神々の誕生を説く記述が含まれていることを見だし、この引用のしかたに周濂溪の不連続なる万物生成論と重なる要素を排除せんとする意図を看取する。素行の「水土」の議論において指摘される相対的な価値観は、周濂溪批判の際にも用いられたものであり、『中朝事実』において提起される日本主義は、周濂溪批判に見られる思考を基底として発展したものと見ることができる、というのが著者の主張である。

IV. 本論文の評価

従来の素行研究においては、素行の思想が朱子学と本質的に対立しているという前提に立って議論が進められてきたが、本論文ではその図式に疑義を呈していることがまず評価される。さらに、従来の前提を排除して考察を進めた結果、素行の思想には、朱熹に共感する部分も少なくなく、朱熹に向けられているかに見える批判の矛先は、実際は周濂溪に向けられたものである、という点を解明した点にとりわけ独自性が認められる。素行が周濂溪を批判していることに言及している先行研究もあるのも事実だが、それらの研究は、周濂溪批判の言辭に関して、朱熹を含む宋儒に対する批判者の一部と見るだけであり、そこから周濂溪批判の内容や意味を考察するところまで議論を展開させたものは皆無である。

周濂溪批判に注目することによって、これまで論じられることのなかった、素行の世界観の新たな一面を明らかにしたことも評価される。それは「太極」を論じた際に見えていた、世界を無限の連続性を持った一体物と見る考え方である。素行がこのような世界観を論じるときには周濂溪のことを念頭に置いており、素行の世界観は周濂溪批判において示される観点からみたときに、より理解が深まるものと言える。ほとんどの先行研究は、素行を朱熹と対比することに専心しているため、その世界観が十分に読み解けなかった。この世界観は「公」の論や日本主義など様々な論点でも活かされており、素行の思想を理解するためには極めて重要である、という著者の主張には一定の妥当性が認められる。

素行の著作を丹念に読み解き、上記の独自性を発揮した本論文ではあるが、解決すべき課題が残っており、ここでは以下の三点を指摘する。

第一は、本論文における考察と素行の他の論点との関連についてである。本論文では、「公」の論や日本主義について論及されているが、素行にはそれ以外にも取り上げるべき論点がある。たとえば、士道論や兵学は戦前から続く素行研究の中心的なテーマであるが、本論文ではほとんど触れていない。素行の思想を総合的に把握するには、これらの点との関連も視野に入れた研究が必要であることは自明である。

第二は、論文の構成である。ざっと読むと第三章で議論が一旦完結しているようにも見え、そこまでの議論と第四章以降、とりわけ第五章の議論との有機的なつながりが若干稀薄に感じられる面がある。もちろん、論文の中ではつながりを意識した論述がなされており、丹念に読み進めていくとその点を理解することはできるのであるが、読者に不必要な労力を強いる書き方は避けるべきであろう。

第三は、論文中で使われるタームの説明が行き届いておらず、大まかな理解しか示されていないように見受けられる部分が含まれていることである。全体の結論には影響を及ぼさないにしても、やはり読者を十分に意識した丁寧な論述が望まれる。

このように解決すべき課題は残ってはいるが、すくなくとも後半二つは比較的容易に解決できるものと考えられる。素行の思想を理解するために朱熹一人との比較に終始していた感がある先行研究の方法論上の不備を指摘し、朱熹以外の儒者との比較も不可欠であることを主張し、具体的に周濂溪と朱熹の思想を比較することによってその有効性を実際に示した点に、素行の思想研究に一石を投じる学術上の意義が認められ、今後の研究のさらなる発展が期待される。結論として、博士学位を授与するに値する論文であると評価される。